

## 安倍内閣総理大臣の靖国神社参拝に対する抗議文

2013年12月26日、貴職が靖国神社に参拝されましたことに、私たち真宗大谷派宗議会議員は、激しい憤りと、深い悲しみを禁じ得ません。

私たちはこれまでも長年にわたり真宗教団連合等を通して、「首相・閣僚の靖国神社公式参拝の中止」を求めて要請を続けてまいりました。それは靖国神社が、戦争の犠牲者を、国のために命を落とした英霊として祀り、人類最大の過ちといわれる戦争を聖戦として正当化する役割を、創建以来現在に至るまではたし続ける、特異な性格を有する宗教施設であると受け止めるからであります。また、靖国神社が宗教施設である以上、貴職の参拝は、憲法に定める「政教分離の原則」に反する行為と言わざるを得ません。

真宗大谷派宗議会は、戦後五十年を迎えた1995年、教団の近現代史を問い直すなかで、「私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔」し「人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧じることのない、すべての戦闘行為を否定し」、「これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意」する「不戦の誓い」を表明いたしました。

その後も微力ながら、非戦・平和の願いの具現に努めております、そのことから、今回の貴職の行為は、どうしても看過できるものではありません。

戦後、わが国は、戦争を深く反省し、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義を柱とする「日本国憲法」を国の根本規範として掲げ、戦争放棄の国としての歩みを続けてきました。

しかしながら、その「日本国憲法」の理念を国民の先頭に立って遵守すべき内閣総理大臣が、靖国神社に参拝することは、個人的な思いはどうあれ、自ら憲法の理念を踏みにじり、戦争のできる国を志向するものと言わざるを得ません。

貴職は参拝後の「恒久平和への誓い」と題された談話において、「アジアの友人、世界の友人と共に、世界全体の平和の実現を考える国でありたい」と述べておられます。ならば、まずなすべきは、私たちがおかした過ちの直視と、それに基づく戦争責任の明確化でありましょう。しかし残念ながら、この度の談話ではそのことに一切触れられてはいません。それでは、国内外の人々からの本当の理解と共感を得られることはないでしょう。

参拝後、アジア諸国のみならず、国内外からも批判や危惧、失望の声が沸き起こった事実、どうか真摯に耳を傾けていただきたいと強く願うものであり

ます。

私たちは戦争の犠牲になられた方々への追悼を否定するものではありません。また靖国神社に参拝されるご遺族の心情を蔑ろにしようとするものでもありません。むしろ本当に追悼するとはいかなることなのか。戦争によって命を奪われた人たちを尊重し、その人たちの真の願いに応える道はどこにあるのか。国内外の人々と共に、そのことをこそ尋ねていきたいと考えています。

それは、「英霊」に対する「敬意と感謝」ではなく、すべての戦争犠牲者に対する「懺悔と謝罪」によってこそ開かれていくものであると確信しております。

今回の貴職の靖国神社参拝は、かえって多くの戦争犠牲者の尊厳を再び冒し、その尊い犠牲を心に刻んで歩んできた平和国家への道に逆行するものであると言わざるを得ません。ここに強く抗議いたしますとともに、今後二度と同じことが繰り返されないことを強く求めます。

内閣総理大臣 安倍晋三 殿

2014年1月16日

真宗大谷派宗議会議員	鷲山	宣裕	小川	香潤	八島	昭雄	那須	信純
	小林	光紀	藤戸	秀庸	土肥	人史	轡田	普善
	滝澤	康俊	高屋	康順	江尻	静哉	崖	啓互
	諸岡	敏	木越	涉	大谷	制以知	但馬	弘
	朝倉	順章	鈴木	現秀	三島	多聞	里雄	康意
	下谷	泰史	沼	秋香	最上	知道	酒井	良
	藤井	宣行	勅使	忍	富田	泰成	馬場	礼子
	訓覇	浩	東野	文惠	高月	賢瑩	高木	文善
	林	治	清	史彦	奥林	曉	望月	慶子
	渡邊	眞理	長峯	顕教	草野	龍子	武宮	信勝
	岩坂	賢龍	藤内	和光	田澤	一明	藤井	学昭
	本間	義悦	眞野	琢児	玉光	順正	本多	一壽
	杉浦	明道	渡邊	学	宮本	亮二	篠田	穰
	赤松	範昭	旦保	立子	金倉	泰賢	釋氏	政昭
	新羅	興正	木全	和博	大城	雅史	福田	元道
	富士澤	丞	竹内	彰典	齊藤	法顕		